

ホームページ



COLORS®

ちょっと外の空気をすいにいこう。

Let's get some fresh air.

お問い合わせ先

株式会社カラーズ福祉用具事業部 東京都大田区大森西6-2-2 STビル1F
TEL: 03-5767-5219 / FAX: 03-5767-5217 / E-mail: kurumaisu@colors-g.co.jp



介護事業所 × 町工場が生んだ

外出がラクな
介助型車いす「COLORS®」
カラーズ

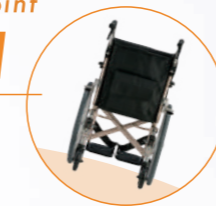
大切な人との散歩や旅先での気軽な外出をサポートします。

COLORS®

特許取得済

TAISコード・貸与マーク取得済

point
1



傾斜のある道路も
ラクにまっすぐ進む!

point
2



前輪を浮かせて
ラクに曲がれる!

point
3



段差を安心して
ラクに越えられる!

point
4



踏切や砂利道も
ラクに進める!



紹介ムービー

令和2年 第31回大田区中小企業 新製品・新技術コンクール最優秀賞受賞
令和2年 特許第6664794号取得
令和5年 福祉機器コンテスト2023 優秀賞受賞

※仕様変更により、製品のデザインの変更がある場合がございます。予めご了承ください。



COLORS®の特徴

日々の散歩や旅先に、少ない力でもラクに、簡単に車いすを押せるような、4つの特徴があります。

point 1 水勾配の傾斜のある道路でも
ラクにまっすぐ進む！



前輪キャスターが進行方向に固定されているのでラクにまっすぐ進みます。道路の水勾配による傾斜で、道路の端へ車いすが流れてしまい、大変だった方におすすめです。

point 2 前輪をちょっと浮かせて
ラクに曲がれる！



前輪を1mmでも浮かせれば簡単に曲がるができます。サスペンションがついた回転する後輪がしっかりと体重を支えてくれ、前輪が浮くので、ラクに方向転換ができるのです。

point 3 段差をラクに安心して
越えられる！



ハンドルを下に押すだけで簡単に前輪が浮き、安心して段差を越えられます。片足でティッピングバーを踏み込む操作に不安を感じる方におすすめです。

point 4 踏切や砂利道でも
ラクに進める！



大きな車輪に重心があるため、踏切でも悪路でもグイグイ、進みます。前輪が回転せずにラクに浮く仕様のため、前輪が線路の溝にはまったり、砂利に埋もれたりすることを防ぎます。

カラーバリエーション

日常に寄り添う自分らしいカラーを2色からお選びいただけます。

Sand stone



Black



仕様・サイズ

重量：13.4kg
フレーム素材：マグネシウム
前座高：43cm
タイヤ外径：20インチ
耐荷重：75kg
TAISコード：02018-000002
本体価格：オープン価格

走行時(mm)

1030 580



折りたたみ時(mm)

830 320



駐車ブレーキ 介助者の手が届きやすい！



フットサポート取外し可能



バッグ付き

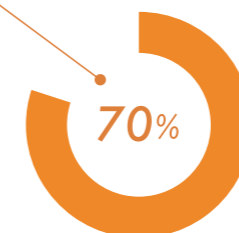


モニター評価で高い評価をいただきました！

2019年1月 株式会社福祉用具
総合評価センター調べ

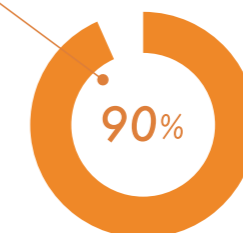
段差の乗り越えと
走行において

明らかに優れている



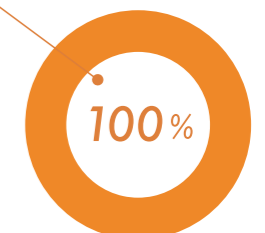
傾斜のある道路での直進性と
踏切の通過において

明らかに優れている



砂利や小石のある
不整地の走行において

かなり容易





COLORS® 開発チームのメンバー



田尻 久美子
株式会社カラーズ
代表取締役

大手通信系IT企業、大手在宅介護企業等を経て、2011年12月に株式会社カラーズ(東京都大田区)を設立。子どもから高齢者までが事業範囲。「多世代共生の地域づくり」を理念とし、地域活動や様々な団体との連携に力を入れている。介護支援専門員、介護福祉士、保育士。

関 英一
有限会社関鉄工所 代表取締役

70年続く機械装置や大型部品の製作会社。大田区の工業会では青年部の長を歴任した。工業の発展と共にものづくりの楽しさを伝えるべく異業種や商店街と組み、イベントを行なう。小学校等への出前授業も請負っている。

飯沼 勉
株式会社カラーズ 福祉用具事業部
福祉用具専門相談員

大手バイク整備工場に14年勤務の後、事故現場での救助活動をきっかけに、「人の役に立つ仕事がしたい」と介護業界へ転職。福祉用具の活用や環境整備を通じて、その人らしい生活に寄与することを信念に、福祉用具専門相談員として従事している。

宮田 尚幸
風と地と木合同会社 代表

文房具や服飾小物のデザイナーとして働いた後、デンマークの全寮制学校エグメント・ホイスコーレに留学。杖職人の家で住込みのインターンの後、2019年に杖「ヴィルヘルム・ハーツ」の日本代理店となる。心理的安全性の探究をテーマにデザインと社会活動を行う。

介護事業所 × 町工場 × デザイナーの想いが詰まった

“外出介助しやすい” 車いす COLORS® 開発ストーリー

福祉用具を使って、利用者さんとその家族の生活を楽しく快適にしたい——。そんな株式会社カラーズの願いが発端となり、介助式車いすCOLORS(カラーズ)は生まれました。開発にかかわった4人の振り返りを通して、誕生までの道のりと、それぞれが大切にしていることを紹介します。



車いすを使うのは病院やデイサービスに行くときだけで、お出掛けする人は少ないんです。それって寂しいなって、ずっと思っていました。お散歩とかお花見とか、楽しい場面でも気軽に使っていただきたいなと。

田尻(以下、田): やっと、私たちの想いが形になりましたね。

関: ここまで長かったですよね。6年前でしたっけ？

田: そうですね。介護現場で働く当社のスタッフと利用者さんの声を集めてみたら、福祉用具を使って利用者さんの生活の困りごとを解決するアイデアがたくさん出てきて。それをどうにかして形にしたいと思いました。そこで、関さんに相談したんですよ。

地元(東京都大田区)の商工会議所の若手経営者の会合で、初めて関さんにお会いしたとき、「何でもできますので、お気軽にご相談ください」と言ってくださったので、“課題表”を持って伺ったという。

関: あのときは、まさか車いすを開発することになるとは、まったく想像していませんでした。ネジを一つ変えるくらいの

ことだろうなって(笑)。

田: 私たちも、何か一つでも課題を解決できたらいいくらいの気持ちでした。車いすなんて、大それたことは考えていなくて(笑)。(エクセルのシートを見せながら)これです、あのとき関さんに見せた“課題表”！

飯沼(以下、飯): 懐かしいー。

田: 倒れない、もしくは倒れても戻ってくる杖とか、いろいろ。

飯: 結構、危ないんですね。落ちた杖を拾おうとして転倒し、顔を打撲してしまったり。

関: 「こういう苦労をしている人たちがいるんです」と、田尻さんと飯沼さんにアツク語られて。

田: そのなかで形になったのが、車いすだったんですね。

飯: 搭乗者に主眼を置いて開発された車いすはたくさんありま



工業の業界と介護の業界とでは、使う用語や“常識”が違って、話が噛み合わないこともたくさんありましたよね。

すが、操作する介助者に主眼を置いたものは、僕が知る限りほとんどなくて、介助者のニーズに応えられる市販の車いすが見つからなかったんです。

大田区には、歩道のための段差がない“かまぼこ型”の狭い道路が多く、水勾配で片流れするんです。それだけでなく、「段差を越えるのに苦労する」「踏切を渡るのが大変」という話もよく聞いています。

車いすの貸し出しをしても、使うのは病院やデイサービスに行くときだけで、お出掛けする人は少ないんです。それって寂しいなって、ずっと思っていました。お散歩とかお花見とか、楽しい場面でも気軽に使っていただきたいなと。

関: うちの鉄工所に来る依頼のほとんどは、お客さんの工場から「シャフトが壊れたから修理してほしい」「部品を交換してほしい」といったものなので、田尻さんたちからの依頼は新鮮でした。自分も将来的には、介護したりされたりするだろうから、人ごとではないなと。でもさすがに、車いす全部をつくるつもりはなくて、前輪だけ固定すれば真っ直ぐ進むのではないかと、市販品に取り付けるものをつくれれば解決できるかな、くらいに考えていました。

田: 途中まで、その方向で進めていましたよね。

関: 市販の車いすは2、3年に1回、フルモデルチェンジするという衝撃的な事実を知るまで(笑)。フルモデルチェンジすると全体の寸法が変わり、取り付けの部品が合わなくなってしまうから、「それじゃ、ダメじゃないの?」って。着手してから3、4年たってましたよね。

飯: あと、同じ型の車いすでも個体差があって、うまく部品を付けられるものとそうでないものがあるということも判明して。

関: まさか、そこで振り出しに戻るとは(笑)。

飯: そこからが長かったですよね。

田: よく諦めずに、続けてくださいましたよ。

関: 実は、ずっと不安でした。改良したものをお見せするときに毎回、「飯沼さんに、今度はどこをダメ出しされるかな」って、思っていましたから。

工業の業界と介護の業界とでは、使う用語や“常識”が違って、話が噛み合わないこともたくさんありましたよね。田尻さんに車いすの構造の話をして、半分もわかってくれないし(笑)。

田: そうですね(笑)。中国語とドイツ語くらいに違うんじゃないですか？

関: 僕らの「普通、こうでしょ?」がまったく通じない。それで毎回、

どうやって説明したらわかってもらえるか、考えていました。

飯: 関さんに「それはできない」と言われても引き下がらず、「いや、できそうなんですけど」と、しつこくお願いしてしまいました。

宮田(以下、宮): 飯沼さんは、前職でオートバイの整備をしていましたよね。それも、ここまで形にできた大きな理由だと思います。

飯: オートバイは車いす同様、金属、樹脂、ゴムでできた部品や電気を使うので似ている部分もあり、中途半端な知識があるから、関さんに「こうしてほしい、ああしてほしい」とリクエストできたんだと思います。

素人だから、言いたいことが言えたんです。ノウハウがあったら、関さんに頼むまでもなく「無理だよな」と、ほとんど諦めていたかもしれないです。



使う方の手足となる道具として、
車いすの存在を前面に出さないように。

田: それで「出来上がった!」と思ったら、「工業的」な感じの見た目だったんですね。機能面ばかりに注力していたから。エンドユーザーに使っていただくには、見た目や使い心地も大事だよなって。「やわらかい」感じのデザインにバージョンアップする必要があるということで、宮田さんに声を掛けて。

関: 「あっ、また一人、言語が違う人が加わった」みたいな(笑)。

田: そうですね(笑)。デザイナーさんもまた、違った視点で物事を見ていますから。私たちが重要だと思っていないことが、宮田さんにとってはすごく重要だったり。

飯: 部品一つとっても、「この形でないと…」とか。色も試行錯誤しましたよね。特に、サンドストーン(ピンクゴールド)のほう。

関: これは「工業あるある」ですが、「これと同じ色(部品)にしたいんですけど」と、写真などで提示されることがよくあるんです。でも、型番や色の番号で言ってもらわないと、同じものを用意できず、何度も試行錯誤を重ねることになるんです。今回も番号でリクエストしてもらえなかったので、

結構、大変でした。宮田さんにも、何度もダメ出しされて(笑)。できないときは「これは無理です」って言いましたけど。

宮: 本当に、関さんが現場の職人さんとの間に入って、通訳というか間を取りもってくださったおかげです。それに関さんは、できないときは「できない」と言うだけでなく、「もしそうしたいんだったら、こういうふうにしたらできるかも」と、前向きなフィードバックをくださったので、理想の形にかなり近づけることができました。

飯: 宮田さんに加わっていただけてすごくありがたかったのが、障害のある方の気持ちを汲んだ上でデザインしてくれたことです。

宮: 「使ってみよう」と思ってもらうことが、いちばん大事だと思います。使う方の手足となる道具として、車いすの存在を前面に出さないように。車いすに乗っている方は、自分が車いすに乗っていることを大っぴらにしたくないとよく聞くので。それから、COLORSは従来の車いすに比べて

軽く、ラクに操作できるものなので、重そうな印象にならないように、車体を組んでいる曲線や形、色などにこだわり、見た目の印象と機能がマッチするように努めました。

豆知識

ロゴにもCOLORSの特徴がパッと見て分かるような要素を入れ、オリジナリティが出るように工夫をしました!



車いすを操作するのが初めての人でも、直感的に扱いやすい、難しい説明がいらぬものにしたかったんですね。

飯: COLORS を開発するうえで、機能面においては操作する介助者のストレスを軽減することに注力したので、ローテクにこだわったというところもあるんです。

田: 車いすを操作するのが初めての人でも、直感的に扱いやすい、難しい説明がいらぬものにしたかったんですね。

関: 電気のモーターを付ければ左右独立で動くので、カーブした道でも操作しやすいし、片流れしないと提案しましたよね。でも飯沼さんから、「利用者さんが常にバッテリーをフルにしておくことができますか?」「バッテリーが充電されているかパッと見てわかりますか?」と言われて。確かに、自分の父親やそのくらいの年齢の方は、わからないかもしれないなど。

田: 前輪をパッと楽に浮かせることができるのもいいですね。操作を体験したとある記者さんが、「魔法の車いす」と表現していました。

関: 大きなおじさんが乗っていても、小柄なおばあさんが操作できますから。

飯: 利用者さんに「これは便利!」と言ってもらえるものでなかったら、開発する意味がないと思っています。市場に出て人に使ってもらって、「この車いすのおかげで家族で楽しく出掛けることができました」とか、そういった声を聞けたときにゴールだと思っているので、これからが本番だとドキドキしています。あとはやっぱり、一発屋で終わらず、継続的に提供していきたいですね。

田: 自社だけで取り組むという時代ではないですから、これからも異業種のプロフェッショナルとチームを組んで、利用者さんのニーズに応えていきたいですね。

(2022年9月6日収録)

